

「『百科全書』と進歩の言説： ディドロとダランベールが語る技芸と科学の歴史的進歩」

*L'Encyclopédie et le discours du progrès: l'histoire des progrès des
arts et de la science selon Diderot et D'Alembert*

井田 尚
Hisashi IDA

序論 「進歩」の概念と啓蒙主義のイデオロギー

『百科全書』の編纂にあたって、ディドロとダランベールは人間知識の歴史的進歩の成果の記述を重視した。ただし、一口に人間知識の進歩と言っても、進歩のプロセスやペースは個々の学芸の性質によっても異なる。たとえば後述のように、無名の技術者や職人による発明が改良を重ねられて産業技術に発展するケースが多かった技芸の進歩が匿名性を大きな特徴とするのに対し、科学の歴史的な進歩は、少数の偉大な科学者による発見や理論に負うところが多い。科学史家トーマス・クーンは、既存の支配的理論に取って代わる斬新な思考の枠組や問題系を提供し科学者の集団の支持を集めるに足る規範的な大発見や理論を「パラダイム」と命名し、歴史的な大発見や新理論が引き起こす科学的認識の布置の急変を「科学革命」と呼んだ。天動説を覆したコペルニクスの地動説や、デカルト物理学にとって代わったニュートン物理学は、科学革命をもたらしたパラダイムの代表例とされる。

しかし、科学の歴史を塗り替えるどれほど偉大な発見や革新的な理論といえども、キリスト教の教義への抵触や既存の公認理論・競合理論との対決などの障壁を克服し、科学界・学問界から一般世間にまで浸透し広汎な支持を得るに至るまでには、地動説や進化論の例が顕著に示すように、時に長い時間を要した。

キリスト教の教義に由来する神学的な機制やアリストテレス哲学、デカルト哲学など既存の公認理論、同時代の競合理論との対抗関係などを考慮に入れると、少数の偉大な科学者による発見や理論がもたらす科学の「進歩」の歴史は決して直線的ではない。現実の科学の歴史、殊に同時代の位相においては、直線的な進歩の歴史として叙述されがちな科学史ではパラダイム転換によって淘汰されたはずの対抗理論との競合関係や、新理論が学問界や社会に浸透するのに要する時間的遅延こそが、むしろそうした大発見や新理論の受容の実態を示し

ているからだ。

さらに、「進歩」の概念そのものが、無色透明な時間意識とは程遠いイデオロギー色の強い概念であることに注意しなければならない。フランスにおいて「進歩」の概念は、十七世紀末の古代近代論争（新旧論争）で近代人の古代人に対する優越を唱えた近代派の歴史観に端を発し、旧社会がいよいよ綻びを見せ、啓蒙主義が隆盛を迎える十八世紀中期から後期にかけて、フィロゾフが共有する哲学的信念としての役割を果たした後、十九世紀に実証主義の発展とともに学問的・社会的通念として定着した。その意味では、すぐれて近代的な概念である。

社会に浸透・定着し支配的観念に転じるにつれ、その歴史的起源が忘却されるのはあらゆる概念の常であるが、十八世紀の学問において語られる人間知識の歴史的「進歩」は、近代的な発展史観に染まった現代の我々がイメージする中立的・客観的な意味での科学の理論的・技術的發展の枠組には収まらない、極めて党派的な主張であることを思い起こすべきだろう。十八世紀のフランスで歴史的「進歩」を唱えることは、すなわち、専政、宗教的不寛容、迷信、社会的不平等などに起因する文化的・知的停滞に抗い、有益な知識の社会的普及によって人間性の向上を目指す啓蒙主義に与する思想的選択とほぼ不可分であった。

十八世紀の学問において「進歩」の概念は、人類が営々と積み上げてきた過去から現在に至る科学的進歩の歴史自体を指すとともに、王権や教会による検閲や守旧派の批判、神学や古典古代の伝統など過去の遺産、同時代の公認理論・競合理論などとの対抗関係を乗り越え、理性の働きに基づいた人間知識の前進を希求する啓蒙主義の哲学的イデオロギーをも担っていた。つまり、啓蒙期のフランスにおいて「進歩」とは、仮想敵として措定された「反動」諸勢力および「反動的」諸学問との対決によって積極的価値を帯びる極めて戦闘的かつ政治的な理念だったということである。

『百科全書』の編纂者であるディドロやダランベールがことさらに「進歩」を口にする時には、『百科全書』に正当な批判を逸脱した誹謗中傷を浴びせ、人間精神の前進を妨げている頑迷な「反動」諸勢力を牽制しつつ、『百科全書』が編集理念に掲げる「哲学の精神」のアピールによって一般読者を『百科全書』と啓蒙主義の陣営に取り込もうとする、党派的な勧誘と説得の意図に基づいている場合が多い点に留意したい。

1. 項目「百科全書」と進歩の哲学

『百科全書』の項目「百科全書」(Art. *ENCYCLOPÉDIE*)の冒頭で、ディドロは人間知識の進歩の成果を後世の読者に伝えることを百科事典の最も重要な使命として挙げている。

実際に、百科事典の目的とは、過去の時代の業績が後に続く時代にとって無駄な業績であったことにならないように、また、今より物知りになった我々の子孫が、なおかつ今より有徳かつ幸福になるように、そして、我々が人類の名に充分値することなく死ぬことがないように、地上に散らばった様々な知識を收拾し、その全体的な体系を我々が共に生きる人々に説明し、我々の後に続く人々に伝えることである。¹

このように、『百科全書』の刊行計画には、同時代および未来の一般読者に人間知識の総覧を提供することで人類の知的進歩の礎になるという明確な目的があった。このことから、啓蒙期のフィロゾフ達の多くが支持した進歩の哲学が、『百科全書』の編纂方針においても、百科全書派が与する立場を世間や後世にアピールするイデオロギー的選択としてどれほど重要な意味と期待を担っていたかが分かる。

しかし、ディドロらフィロゾフが支持した人間知識の歴史的進歩という哲学的イデオロギーは、『百科全書』の編纂にあたって大きな原理的難問をも突きつけた。学問や技芸の日進月歩の変遷は止まるところを知らないのに対して、それらの知識を記述する作業は多大な労力と時間を要するため、辞典類の編纂者は、著作をようやく刊行した暁にはその内容が既に時代遅れのものになっているリスクを常に抱えていたからである。ディドロが『百科全書』の編纂の必要条件として挙げているのはスピードである。ディドロは、編纂に無駄な時間をかけた語彙集や辞典類の大半を色褪せさせる最新の発明や発見がもたらす学芸の知識の布置の急変を「変転」(« révolution »)と呼んでいる²。学芸の歴史を記述する作業は、それぞれの分野で絶えず起こる「変転」と人間知識の進歩のスピードとの戦いでもあったのだ。

II. 技芸の進歩と国益

項目「百科全書」で執筆者のディドロは、フランスの技芸の技術や発見が、産業技術のライバル諸国への流出を懸念する王権によって隠匿され、人類の知識の進歩に貢献する機会を失っている現状を嘆き、国益という目先の経済的な利益にとらわれずに知識や技術を全世界に広めることの意義を訴えている。

¹ *Encyclopédie*, Art. ENCYCLOPÉDIE, t. V, p. 635.

² この「変転」(« révolution »)の概念は、歴史の連続性を断ち切る変革という点で、時間的な連続性を特徴とする進歩の概念と一見相容れないように思えるが、人間知識の進歩の歴史は学芸の諸分野の時代を画した「変転」の集積と考えることもできるので、両者は切っても切れない関係にある。ただし、急激な変化や大きな変革を指す「変転」は必ずしも進歩を伴わないので注意が必要である。「変転」は学芸の進歩をもたらしもすれば、国民の文化的な衰退を引き起こしもするのである。なお、十八世紀の歴史叙述における「変転」の概念については、ジャン＝マリー・グールモの以下の著作がある。Jean-Marie Goulemot, *Le règne de l'histoire --- Discours historique et révolutions XVIIe-XVIIIe siècles*, Paris, Albin Michel, 1996.

ディドロによれば、ある技芸の起源を示し、その技芸の進歩の歴史が知られている場合にはその歩みを辿るべきだろうが、そうでない時には、現実の歴史を推論と仮説的歴史で置き換えねばならない。その場合には、しばしば小説 (« roman ») の方が真実よりも「教育的」 (« instructif ») だという³。ディドロは、技芸の歴史に関しては、現実の歴史よりも推論に基づいた仮説的歴史の方が往々にして読者にとって「有益」であると述べているのである。作り話の方が現実の歴史よりも読者のためになるとは奇妙だが、これは『百科全書』が編纂された当時のフランス社会で技芸が置かれていた低い地位と技芸の世界の閉鎖的性格を踏まえて初めて理解できる主張である。要するに、ディドロは、技芸の知識があまりになおざりにされて来たので、未知の事実が多すぎる技芸の起源とその進歩の歴史は仮説的歴史によって補わざるを得ない、と言いたいのだ。しかし、推論に基づく仮説的歴史は現実の歴史よりもしばしば「ためになる」というディドロのこの主張は、技芸の現実の歴史に対する批判的な価値判断を伴っていることに注意したい。ある技芸の起源から現在に至る進歩のプロセスを一般読者に分かりやすく理解させる力において、時に合理的な推論に基づいた仮説的歴史の方が、欠落と隠蔽に満ちた現実の歴史よりも優れている、とさも言いたげなのだ。ある技芸の歴史が世に知られないまま闇に葬り去られる損失に比べれば、たとえもっともらしい推論に過ぎなくとも、その技芸が辿ったと思われる進歩の歩みを読者に提供できる利益を取るべきだ、と主張しているようにも見える。このように、ディドロが技芸の進歩の歴史の叙述のあり方を論じるにあたって、専門知識を持たない一般読者層に対する「教育効果」を重視していることは非常に重要である。教育が言葉による説得行為を何よりも必要とすることを考えると、『百科全書』に記述される技芸の歴史を進歩の哲学の立場からの勧誘と説得の言説として解釈することもできるからである。

ディドロによれば、そもそも、技芸の起源や進歩は、学問の起源や進歩と性質が異なる。学者達は会話を交わし、著作を執筆し、自らの発見を強調し、互いに反論し合う。こうした反論の数々は事実を明るみに出し、時期の証明にもなる。職人は、反対に無名のまま世に埋もれて孤独に生き、何をするにも自分の栄光ではなく利益のために行う。何世紀もの間ある家族の中で秘匿される発明が数多くある。それらの発明は一子相伝で受け継がれ、完成するにしても衰退するにしても、その発見が誰によっていつなされたのかを正確に知ることができない。

ある技芸が完成へと向かう目に見えない歩みも時期の混同を招く。ある者が麻を摘み取ると、別の者がそれを水に浸し、さらに別の者が皮を剥く。こうして、麻は粗縄から糸、そして布地になる。しかし、これらひとつひとつの進歩の間には一世紀もの時間が流れているのである。ある産物をその自然の状態から最も完全な用途にまで高めた人物が世に知られずに

³ *Ibid.*, p. 647A.

終わるとは考え難いだろう。ある国民が突然新しい布地を身に纏うことになったら、誰のお蔭でそうなったのか尋ねはしないだろうか。ところが、こうしたことは全く起こらないか、減多にないのである⁴。

通常、偶然が最初の試みを示唆するが、そうした試みは実を結ばず人に知られない。別の人間がそれらの試みを再開し、成功しかけるが、全く世の話題にならない。やがて3人目の人間が2人目の人間の足跡を、4人目の人間が3人目の人間の足跡を辿り、そうしたことが続き、とうとう最後の人間だけが素晴らしい実験を行って評判を呼ぶことがある。あるアイデアがアトリエで考案されるとすぐにアトリエの外に広まるということもある。人間は同時にいろいろな場所で仕事をしており、それぞれが別々に手作業をしているので、同時に複数の人間が名乗り出る発明は厳密には誰のものでもないか、その発明によって金持ちになる（利益を得る）人間のものにしかない。発明が外国から得られたものなら、国民的嫉妬のせいで発明者の名は伏せられ、知られないままになるだろう⁵。

このように、偶然の発明・発見を起源とするケースが多い技芸の進歩は、職人や技術者による何世代にも及ぶ脈々たる技術改良の努力に多くを負っており、ある技術を完成した人間やある発明から経済的利益を引き出した人間など、ごく少数の例外を除いて、発明者を個人として特定することが困難な匿名性をそもそも特徴としている。

だが、発明者が名誉に浴する機会が少ない技芸の匿名性以上に技芸の進歩を妨げる元凶としてディドロが指摘するのは、個人による発明や発見の功績を意図的に覆い隠す悪習である。ディドロはそのひとつの原因として、自国民の発明ばかり最良したがる国民的自尊心という万国共通の普遍的情念を挙げているが、もうひとつのより深刻な原因として、国益のためと称して最新の技術を秘匿したがるフランス王権と政府の隠蔽体質を指摘している。

自身、『百科全書』の技芸項目や図版の編纂にあたって、徒弟制度によって経験で身につけた技術を言語化する習慣を持たない職人の世界と、職人の知識や機械の構造を国家の保護の対象として秘匿するフランス王権の政策に煮え湯を飲まされたディドロは、政府が工場（マニュファクチュール）への立ち入りや、職人の仕事の見学、職人へのインタビュー、道具・機械類のデッサンを認めるべきだと主張する。

職人があまりに口を閉ざすので、自分で徒弟修行をするか、信頼できる人物に徒弟修行をさせた方が手取り早いことがある。こうすればほとんどの秘密を知ることができるし、そうして知り得た秘密は例外なく全て広めるべきだ⁶、とまでディドロは述べる。ディドロは、国益のためと称して技術を秘匿する偏狭な精神と、地球全体や人類全体の未来への貢献を使

⁴ *Ibid.*

⁵ *Ibid.*

⁶ *Encyclopédie*, t. V, Art. ENCYCLOPÉDIE, p. 647.

命とする進歩の哲学の違いを以下のように説いている。

この意見が万人のものではないことは知っている。人類の命運に無関心で、自分達のちっぽけな社会と利害関心を越えたことは何も見ようとしない偏狭な精神の持ち主や心根の曲がった輩がいるものだ。こういう人間達は良き市民と呼ばれたがる。その点には同意した上で言わせてもらえば、彼らは悪人だ。彼らの話を聞いていると、よくできた百科事典や技芸の全体史は国王の図書館に丁寧にしまい込まれ、国王以外の人間の目には触れない大きな手稿、民衆の書ではなく国家の書でもあるかのようだ。彼らの言い分はこうだ。「国民の知識やその極秘の取引や発明や産業や資源や秘密や光明や技芸やその全ての叡智を明かして何になるのだ。こうした知識のお蔭で我が国はライバルの国家や近隣諸国に対し優位を保っているのではないのか。」彼らはこうも言うだろう。「外国を啓蒙するのではなく外国に無知蒙昧を広め、地球の残り全てを野蛮な状態に陥れてより確実に支配できる方が望ましくはないか。」彼らは地球上の一点しか占めておらず、自分達には一瞬の寿命しかないこと、自分達がこの一点とこの瞬間のために未来のあらゆる時代と人類全体の幸福を犠牲にしていることに気づいていないのだ。彼らは、ある帝国の平均寿命が二千年に達しないこと、もしかしたらそれよりも前に、歴史上永遠に存続するはずのフランス人という名前を地球上にいくら探しても無駄になる日が来るかもしれないことを、誰よりもよく知っている。こうした考察にもかかわらず、彼らは自分達の見識を広げようとしないのだ。彼らにとって人類という言葉は無意味な言葉であるようだ。彼らが首尾一環していればまだしもだが、別の折には、彼らはエジプトの神殿の秘匿主義を猛烈に批判し、古代の知識の喪失を嘆き、無数の重要なものごとについて口を閉ざすか、ほとんど語らなかった作家達の怠慢や沈黙を非難する有り様だ。彼らは、自分達が同時代人に対して責めているのと同じことを古代人に対して要求していること、自分達もそうであるのに他人だけを非難していることに気づいていないのだ。⁷

ディドロは、産業・通商を国家の保護統制下に置く重商主義政策を採るフランス王権とフランス政府が、専ら国益の観点から有益な発明・発見を含む自国の技芸の知識・技術の公開を拒み、先進技術を隠匿することでライバル国家を出し抜き、国際競争に打ち勝つことに汲々としている様を、本来人類全体の利益に供すべき技芸の進歩に逆行する、利己的で狭量な姿勢として大胆かつ痛烈に批判している。国家間に技術開発競争が存在し、それぞれの

⁷ Ibid.

国家が軍事技術など自国の産業の最先端技術を機密として保護していることは現代においても国際的な常識であるが、基礎的な技術や知識はもちろんのこと、国家機密に該当する一部の先端技術を除く多くの最新技術が特許を得た上、民間レベルで国内・国外に公開されるケースが多い現代と異なり、王権による産業の保護統制が厳しかった十八世紀中期までのフランスでは、技芸に関する基礎的な技術や知識ですら、取材や公開がままならなかった。『百科全書』の編纂においてディドロらが、職人からの聞き書きや工房でのデッサンに基づく道具・機械類の図版の導入など画期的な方針を次々採用することで、フランスの技芸を取り巻くそうした過去の閉鎖的体質に風穴を開け、技芸に関する知識の普及に多大な貢献を果たしたことは周知の事実である。

ディドロのこの議論に従えば、「技芸の全体史」を含む「よくできた百科事典」を自負する『百科全書』は「国家の書」ではなく「民衆の書」であり、国家間の経済競争における一国の勝利ではなく、全人類の知識の歴史的進歩にこそ奉仕すべきである、ということになる。ディドロは、自国の技芸の知識を独占し、国際競争に打ち勝って世界の覇権を握ろうと躍起になるフランス人が、その尊大な国民的自尊心にもかかわらず、「地球上の一点しか占めておらず、自分達には一瞬の寿命しかないこと」を忘れているおめでたさ、身勝手さを嗤ってみせる。

未来へとどこまでも続く人類の寿命の長さに比した帝国の寿命のはかなさを根拠に、全人類の啓蒙と人間知識の進歩を国家的利害を超越した使命として強く印象づけるこのディドロの論法は、自然界で様々な生物種が繰り返す無限の生成変化のプロセスの中では人類の歴史ですら過渡的な一段階に過ぎない可能性を示唆した『自然の解釈に関する思索』（1754）のそれを彷彿させる。ディドロは、物質を媒介とした動物界・植物界・鉱物界の連鎖の中で人類に特権的な地位を認めず、自然界全体の無限の生成変化という唯物論的前提から一種の変異説を導きだしたのと同じように、衰退を半ば運命づけられた国家の一時的栄光よりも、過去から現在を経て未来へと確実に続いて行く人類の歴史に人間知識の進歩を託したのだ。

国家が重視する愛国心よりも人類愛たる博愛の精神を、ナショナリズムよりもコスモポリタニズムを上位に置く発想は啓蒙主義の哲学に共通する考え方だが、技芸の知識の普及による人類の啓蒙の必要を説くディドロの主張は、『百科全書』の編纂方針を貫く進歩の哲学を要言して余すところがない。

III. 『百科全書』の読者戦略の時間性：「哲学の精神」と後世の審判

ディドロは、項目「百科全書」の中で、愛国心や国益を口実に有益な発明・発見を後生大事に抱え込み、学芸の知識の普及による人類の進歩を妨げているフランス国内のこうした

「良き市民」こそが自分達にとって最も危険な敵であったと述懐している。これは、技芸の知識の公開を制限していたフランス政府そのものというよりも、1751年から1753年にかけて「趣意書」および『百科全書』第1、2巻の内容を剽窃呼ばわりする誹謗中傷のキャンペーンを『トレヴー評論』誌上で張り、1752年には『百科全書』の執筆者ド・プラード神父がソルボンヌ大学に提出した神学の博士論文を異端の嫌で告発するスキャンダルを仕掛け、『百科全書』を第一次刊行中断に追い込んだベルティエ神父らイエズス会勢力を中心とした反百科全書派に対する揶揄、牽制と見てよいだろう⁸。

ディドロは、「良き市民」を自称する「偏狭な精神の持ち主や心根の曲がった輩」の執拗な攻撃によって『百科全書』を刊行中断に追い込まれた生々しく苦い記憶を反芻しながら自らに言い聞かせるかのように、優れた批判は返答せずに利用し、下らない批判は無視すべきである、と言い切る。というのも、『百科全書』が現在博する名声を今後十年間保ち続けたら、『百科全書』に批判を浴びせる連中の著作は問題とされなくなり、『百科全書』が忘れ去られたら、尚更彼らの著作は問題とされなくなるはずだからだ。現にフォントネルやビュフォンやモンテスキューの批判者達は世に知られていないではないか。『百科全書』の批判者にも、優れた項目をひとつとして執筆する才能に恵まれた者はいない。『百科全書』は哲学の精神に則って書かれたが、『百科全書』の批判者達の大半は当代の水準にすら達していないので、彼らの著作は短命だが、『百科全書』は数年後に今よりもさらに読まれ、評価を受けるだろう⁹。

このディドロの主張によれば、書物の評価を決めるのは時の流れであり、人類の知的進歩であるから、同時代の一国の読者の趣味に迎合した著作の名声がはかないのに対し、時代や地域によって変化する国民的趣味や利害打算に左右されない普遍的な「哲学の精神」に則って執筆された著作は、たとえ今は大衆の理解を得られなくても、人類や社会が進歩するにつれ真価を認められ、評価が高まることになる。

もちろん、人類の進歩を評価の尺度とする「哲学の精神」と、同時代の自国内の趣味・価値観を主な評価の基準とするいわば「国民的な文学趣味」との対立は、反百科全書派による批判を時代の俗流に媚びた応ずるに値しない誹謗中傷としてかわし、『百科全書』の正当性を啓蒙主義の立場から擁護するためにディドロが設定したイデオロギー的な二項対立である。ディドロは、反百科全書派の妨害キャンペーンによって刊行が風前の灯火となり、同時代のフランスの読者による評価が賛否両論相半ばしていた『百科全書』に対する肯定的な評価を時間の流れの中で実現すべき人類の進歩によって担保しようとしたのである。検閲制度が存在し思想信条および言論の自由が著しい制約を受けていた十八世紀フランスの言語空間を逆

⁸ Marie Leca-Tsiomis, *Écrire l'Encyclopédie. Diderot: de l'usage des dictionnaires à la grammaire philosophique*, Oxford, Voltaire Foundation, 1999, p. 232.

⁹ *Encyclopédie*, t. V, Art. ENCYCLOPÉDIE, pp. 647-647A.

手に取り、同時代の批判者や無理解な大衆の読者層の代わりに後世の読者を味方につけることで『百科全書』の価値を高めようとするディドロの言辞には、啓蒙主義の哲学を旗印にした百科全書派の読者戦略のひとつの特徴が明瞭に伺える。

だが、ディドロが同時代の無理解な大衆や悪意に満ちた批判者を相手にせず未来の選ばれた読者に『百科全書』を捧げる素振りを見せるのは、それだけ同時代の読者の反応と評価を意識していたからに他ならない。書物を世に問いながら同時代の読者の評価を初めから諦める著者がどこにしようか。もちろん、反百科全書派の妨害工作で刊行事業が頓挫しかけ同時代の読者に評価されることを半ば断念しかけていた面もあるだろうが、やはり、同時代の凡百の読者の理解を得られなくとも構わないというディドロの強気の姿勢は、百科全書派と反百科全書派の批判の応酬の渦中で、同時代の読者をいかに自陣営に取り込むかを考えた上での高等な戦術的レトリックと取るのが妥当だろう。論争相手の反百科全書派を時流に阿ねる群小作家と決めつけ、『百科全書』の高い志と時代に先んじた「哲学の精神」を強調すれば、『百科全書』を実際に手にして読む同時代の一般読者層が自らを衆に優れた知的選良として意識し、人類の進歩が実現した後世の読者の優れた見識を先取りしたかのような優越感を得られるからである。

その意味で、人類の知的進歩を根拠に『百科全書』の超俗的な「哲学の精神」の未来における勝利を予言するディドロのコメントは、『百科全書』の潜在的読者層としての同時代の公衆を十二分に意識し、日に日に高まる『百科全書』の評判に自信を得て対抗陣営との論争の困難な現状を打開し、新たな読者を獲得しようとする、百科全書派・啓蒙主義者の立場からの勧誘と説得のパフォーマンスとして読むことができよう。百科事典を定義した項目であるはずにもかかわらず、執筆者のディドロが、わざわざ本論から脱線するようにして、『百科全書』の刊行をめぐる当局との軋轢や対抗陣営との論争について個人的・党派的見解を披瀝し『百科全書』擁護の論陣を張るのは、『百科全書』の読者、それも当面は同時代の読者を説得して論争を有利に展開し、公論を『百科全書』刊行計画の味方につけようという現実的な狙いからなのである。このディドロによる『百科全書』擁護の言説は、語りの時間性の構造という点で、ルソーの『告白録』における自己弁護の言説に似ている。

晩年にヴォルテール、ディドロらと仲違いし、自分がヴォルテールら啓蒙主義一派の「陰謀」の餌食になっているとの被害感情を強めたルソーは、最後の審判のラッパが鳴ったらこの書を手に携えて神の前に歩み出るつもりだと『告白録』の序文で宣言し、過去の記憶と自己の内面を包み隠さず能う限り事実・忠実に語った作者の誠意と語られた内容の主観的な真実性を、死後刊行されることになる『告白録』の来るべき読者に訴えかけることで、敵対者達の「陰謀」で不当に歪められ嘘に塗り固められた自己の社会的イメージを奪い返そうとした。ルソーが神による審判を引き合いに出すのは、『告白録』を生前に刊行するつもりがなく、もはや自分に好意的な読者の存在も期待できなかったから、と考えれば納得が行く。

過去の記憶と内面を記した自伝の真実性の保証と自己の社会的イメージの回復を、たとえポーズにせよ、神による最後の審判というキリスト教信仰における道徳的判定の最終審級に賭けたルソーに対し、無神論者で来世の存在を信じていないディドロは、知識が進歩した後世の読者をいわば神に代わる判定者の位置に据えることで敵対陣営の攻撃に晒された『百科全書』の正当性を印象づけ、一国の利害得失を超えて人類の進歩に資する『百科全書』の「哲学の精神」に対する同時代の現実の読者の支持を勝ち得ようとした。神を証人にするか、後世の読者を証人にするかの違いはあるが、時間軸の上で未来に現在を超越した判定者の存在を仮定し、自らの著作の価値を同時代を含む現実の読者にアピールしようとする点で、ルソーとディドロの読者戦略はキリスト教世界に特有の時間性を共有していると言える。

IV. 『百科全書』にふさわしい文体とは

ディドロは、『百科全書』の精神と内容について論じ、進歩の哲学が人類にもたらす利益と、未来に向かうにつれ増える一方の読者の数とを理由に『百科全書』を批判者の攻撃から擁護した上で、『百科全書』がより多くの人々に読まれるための必要条件となる理想の文体について論じている。ディドロは、英国経験論哲学の祖で『百科全書』の学問分類図「人間知識の体系図」の元となる知の系統樹を考案したフランシス・ベーコン（1561-1626）を例に挙げ、同時代の国民精神の水準をあまりに超えた著作は読者に恵まれない運命にあることを指摘している。ディドロによれば、ベーコン卿の著作が以前より少しは読まれるようになったとはいえ、ベーコン卿の著作の重要さが未だにほとんど理解されていないのは、フランス国民の精神が充分に進歩していないからである。ベーコン卿の思索の高みに達することができる人物はごくわずかしかおらず、おそらく今後その数が増えることもほとんどなさそうだが、『新オルガヌム』などベーコン卿の著作が、いつの日にか簡単でありふれた読み物になることはあり得ないなどと誰に分かるだろうか。この疑念を解明するのは時間の役目である、とディドロは述べる¹⁰。

つまり、書物そのものの価値とは別に、その時代毎の国民精神の水準との一致不一致がその書物の社会的評価を分けるとすれば、国民精神の水準を超えた書物は同時代の評価を期待できないが、その落差が国民精神の進歩とともに解消されれば、後世の読者によって評価される望みが残されていることになる。ディドロは、度重なる批判や妨害を受け、同時代の一般読者による広汎な支持を得るにはまだまだ時間を必要としていた『百科全書』に対する社会的評価を、時代毎の読者の水準を決定する国民精神の歴史的進歩に託したのだ。時間の経

¹⁰ *Ibid.*, p. 647A.

過とともに国民精神が進歩し読者の知識水準が向上するという現象は、一般論としては認められるが、ディドロが置かれた歴史的文脈においては、事実に基づいた客観的真理というよりもイデオロギー的な信念・祈念に近い主張である。

『百科全書』の刊行計画の成否に百科全書派、ひいては啓蒙主義の命運がかかる切迫した状況の中で、思想言論の自由を封じる検閲制度や反百科全書派の攻撃を前に同時代の読者の理解を得るのを半ば諦めかけたディドロが、啓蒙主義と『百科全書』の最終的な勝利を、人間知識の進歩に伴う未来の読者層の獲得と拡大に賭けるしかなかったのは確かだ。『百科全書』の刊行をめぐる百科全書派と反百科全書派の紆余曲折に満ちた戦いの歴史を背景にした時、それが同時代の読者の反応を何よりも意識し、『百科全書』の先進性を公論にアピールすることを狙いとした一種のスタンドプレーとも取れるのは、むしろ自然なことであろう。ともかく、ディドロは『百科全書』に対する未来の読者による評価を人間知識の歴史的進歩という価値観によって正当化しようとした。

しかし、いかに時代に先んじた価値と内容を備えた書物であろうとも、国民精神が進歩した後世の読者に正当な評価を受けるには、とにもかくにも読んでもらえなければ意味がない。そのためには、内容が一般読者の理解を極端に超え出ないこともさることながら、万人にとって読みやすい文章で書かれていることが必須の条件となる。国語の語彙や事項を明快に定義すればよしとされる辞書の文体の優劣を美的な見地から問う読者は通常稀であろうが、ディドロが『百科全書』の文体を重用視するのは、以上のように、より多くの読者を獲得するという実際的な理由からである。

ディドロが『百科全書』のターゲットとして意識しているのは、当然ながら一般読者層である。その点で無駄な装飾を省いた簡潔な文体が一見ふさわしいように思われるが、ディドロによれば、意外にも簡潔な文体は辞書にふさわしくない。普通の読者に必要以上に推測の負担を強いるからであり、読者の推測に委ねるのは、それがたとえ無駄に終わろうとも、内容の理解に支障がない場合に限るのが望ましいのだという¹¹。

また、小説や演劇など文学作品や哲学論など、通常同一の個人によって最初から最後まで執筆されることが多い一般の著作においては、作品全体を一つの文体で統一するのが半ば常識であろうが、この点についても、ディドロは、集团的著作である辞書の性質を踏まえて、文体の多様さは避けがたいことであるとともに魅力でもある、と述べている。ディドロによれば、それぞれの執筆者、学問、技芸、項目、主題には、それぞれの言語と文体があるのだから、それぞれの文体を残したまま刊行することに何ら不都合はない。逆に、編集者が全ての文章に手を入れ自分の文体に直してしまったら、辞典の完成がそれだけ遅くなる割に内容は良くなるらないという。編集者は、学識がどれほどあろうとも、しばしば言語の誤りを正そ

¹¹ *Ibid.*

うとして、かえって事柄に関する間違いを犯しがちだからである¹²。

百科事典の文体は、ありふれた物事については優雅に、個別的で特異な事柄については明快に語るものでなければならない。ディドロは、『百科全書』の理想の文体を、田園の風景画の比喩を用いて次のように表現している。

学芸の百科事典とは、山や平野や岩石や河川や森林や動物や、雄大な風景を多彩に見せるあらゆるものに覆われた広大な田園風景のようなものである。こうしたいろいろなものは光に照らされているが、その照らされ方はまちまちである。一部のものはその性質と光の当たり具合から、風景のほとんど前景に迫り出す一方で、別の様々なものは数限りない中景に留まって見え、さらに遠景にとけ込むものもあるという具合に、全てのものがお互いを引き立て合っているのである。¹³

『サロン評』（1759-81）に先立つこと4年、1755年に刊行された『百科全書』第5巻（Do - Esymnete）の項目 *ENCYCLOPÉDIE* に見られるこの風景画の比喩は、既に後年の絵画評を彷彿とさせるイメージの喚起力に富んでいる。田園の風景を織りなす自然界の様々な事物が太陽光線の当たり具合によって前景、中景、後景の三つの層に分かれながら美しい風景を構成する全体のバランスの妙になぞらえたこの風景の比喩は、百科事典に記述される多種多様な事柄や事物に合わせて文体を使い分ける必要と、執筆者の数だけ存在する多様な文体の魅力とを、読者に理屈ではなく感覚として理解させる効果を狙ったものと言えよう。

しかし、百科事典が執筆者やテーマによって千差万別の文体を許容しようとも、守られるべき最低限の条件はある。先述のように、読者に必要以上に推測を強いる簡潔な文体も百科事典にふさわしくないが、逆に凝りすぎた文体も似つかわしくない。あざとく才気走った文体で書かれた百科事典は、どれほど内容が優れていても読者に読んでもらえないからだ。たとえば、自然が生んだ最高の哲学者と詩人が力を合わせて著作を執筆したとしても、両者が才能と才気に恵まれすぎない方が、かえってその著作は完璧になり、より高く評価されるだろう、とディドロは言う。どれほど機智に富んだ表現、どれほど巧みな比喩であろうとも、限りなく崇高な観念の良さを損なうものであり、確固たる本物の趣味、あらゆる分野における崇高、悲壮、不安、同情、恐怖の感情の偉大な効果、高貴で高尚な感情、偉大な観念は、警句的な表現や対比的な比喩を受け付けられないものなのだ¹⁴。

とはいえ、もし多様な文体を備えた書物が存在するとすれば、それは百科事典である。だ

¹² *Ibid.*

¹³ *Ibid.*

¹⁴ *Ibid.*

が、百科事典の中では、いかに取るに足らない物事でも絶えず密かに人間に関係付けられ、慎みと威厳と感受性と魂の高揚を感じさせる精神的（道徳的）な表現を纏うこと、すなわち、いたるところに誠実さの息吹を見て取れることが望ましい。従って、文体もこの狙いに応えるべく、どれほど輝かしく陽気な色彩が場違いでない箇所でも質素であるべきなのだ。読者を教育し感動させられるのに、楽しませ喜ばせようとするのは的外れだからだ¹⁵。

ディドロは、このように、『百科全書』の文体は多彩な中にも質朴を旨とし、読者の教育と感化に狙いを絞るべきだとしている。娯楽よりも教育を、快楽よりも感銘を優先したこの文体の選択には、明確に進歩の哲学に基づいた百科全書派の啓蒙の意志が見て取れる。

しかし、装飾を削ぎ落とした質朴な文体は、芸のない単なる簡素な文体とは似て非なるものである。娯楽とは一線を画した教育と感化という特殊な役割を担うとはいえ、読者の精神を高め感動を与える力を持つ質朴な文体を実現するには、文学的文体を彫琢する場合に劣らず洗練された美意識と高度な自己抑制が求められるからである。ディドロによれば、端正な文体はあらゆる著作に求められて然るべきであり、大きな書物、中でも辞典に対する侮辱的な寛大さには理解し難いものがある。まるで四つ折り版なら重苦しくぞんざいに、才能も趣味も優美さもなしに書いても許されるかのようだ。息の長い著作にこうした長所を盛り込むことが不可能だとでも思っているのだろうか。あるいは、今日までに出版された息の長い著作の大半にこのような欠点があるので、そうした欠点が判型のせいになってきたのだろうか、とディドロは皮肉に問いかける¹⁶。

よくよく考えてみれば、辞典ほど文体を盛り込みやすい著作はない。辞典の内容は項目毎に区切られており、どれほど長い項目でも一本の演説よりは短いものだからだ。

だが、ディドロによれば、実情は以下の通りだ。見事な文章を書ける人間がこれほど辛い仕事を長く続けられることは稀である。おまけに、成功に伴う栄誉が山分けにされ、一人の仕事が大勢の人間の仕事と一緒にたにされる集団の著作では、自分自身だけを協力者かつ好敵手と見なし、自分の仕事を己の分身のそれと比較し、相手に劣ることは恥じるかもしれないが、相手に勝ろうなどとはまず心がけないので、全力を尽くさず、自分が手を抜いたところは膨大な巻数に紛れて分からなくなってしまうればいいと思うのだ¹⁷。

こうして、協力者の数が増えるにつれて、一人一人の利害関心は弱まり、同僚が多くなるほどそれぞれの仕事は目立たなくなるので、一般に書物はより多くの協力者を用いれば用いるほど凡庸になるものである。

しかし、時の流れとともにヴェールが剥ぎ取られ、各自がそれぞれの器量に従って評価さ

¹⁵ *Ibid.*

¹⁶ *Ibid.*

¹⁷ *Ibid.*, pp. 647A-648.

れるようになると、いい加減な仕事をした者は、誠実な仕事をしたり義務を果たした者と区別されるものだ。何人かが成し遂げた仕事は、我々が全員に対して要求するのが当然であった仕事を教えてくれるものだし、公衆は自分達が満足できない者達を名指しして、彼らがこの重要な企図と、自分達が選ばれたことで浴した名誉にこれほどひどい報い方しかなかったことを遺憾とするだろう¹⁸。

ディドロは、編集者として自分よりもましな人物は見つかってもダランベールより優れた人物には減多にお目にかかれないこと、『百科全書』の執筆に協力した「文人の結社」には替えが利かないので現有メンバーでこの出版事業を乗り切るしかないことを強調した後、再び『百科全書』に優れた文体がいかに必要であるかを次のように強調している。

だが、辞書を優れた文章で書くのが簡単だとしても、文章が優れていることがこれほど欠かせない著作はまず存在しない。旅路が長くならざるを得ないほど、その道程は快適であることが望ましいだろう。その上、この点において我々が成功を納めなかった訳ではないと信ずるべき幾ばくかの理由がある。『百科全書』を隅から隅まで読み通した人物が何人もいる。そして、この特権を日々失いつつあるベールの辞典を除けば、この特権にかつて浴し現に浴しているのは、ほとんど我々の辞典ぐらいのものである。我々は自分達の辞典がこの特権をすぐに失うことを望んでいる。我々は、自分達の作品よりも人間精神の進歩を愛しており、自分達が知識を普及させすぎて、普通の人々を惹き付けて教育するのに『百科全書』よりも強力な書物が必要になったならば、望外の成功を収めたことになるだろうからだ。¹⁹

ディドロは、通読した人間がどれだけいるかを辞書の価値を計る重要な尺度とし、『百科全書』がかつてのベールの辞典²⁰に取って代わる人気を博しつつあることを自負する一方で、人間知識の進歩とともに『百科全書』さえもがいずれは陳腐となり、新たな書物に取って代わられる時代が来ることをむしろ歓迎すべき事態としている。以上のように、読みやすくかつ魅力的な文体は、公衆の教育を狙いとする『百科全書』の使命の実現にとって極めて重要な意味を持つ。とにかく読んでもらえないことには始まらないからだ。しかし、文体の力も手伝って広く読まれれば読まれるほど、『百科全書』の辞書としての革新的な魅力は薄れて行かざるを得ない。それが知識の普及に必然的に伴う陳腐化というものだが、ディドロ

¹⁸ *Ibid.*, p. 648.

¹⁹ *Ibid.*

²⁰ 「ベールの辞典」とは、むろんピエール・ベール (Pierre Bayle, 1647-1702) による『歴史的批判的辞典』(*Dictionnaire historique et critique*, 1697年初版)を指す。ベールが懐疑論の立場から聖書を初めとする権威や伝承に基づく歴史事実に加えた厳密な比較考証は、自由思想家や百科全書派による宗教批判・歴史批判の重要な発生源・論拠となった。

が掲げる進歩の哲学は、時の流れによる自分達の著作の風化さえものともしない。『百科全書』がいかに画期的な辞典であれ、問題なのは、自分達や自分達の著作の名声ではなく、人間知識の限りない進歩だからだ。

このディドロの発想は、未来にわたる全人類の知識の進歩に現在の国家的利害に優越する価値を認めた先述の箇所と同様に、種としての人類の繁栄の歴史すら、自然界の生々変化の過渡的な一段階に過ぎない可能性を示唆した『自然の解釈に関する思索』の唯物論的な自然観をどこか思わせる。むしろ、唯物論の枠組における自然界の生成変化は、キリスト教の創造説と目的論的な自然観への反発から終局的な目的も方向も持たない無限の運動とされているのに対し、人間知識の歴史的進歩は、未来に向かえば向かうほど、知識の普及と民衆の啓蒙によって人類に幸福をもたらすものと想定されている違いはある。また、自然の歴史に人類が占める時間と、有史時代にほぼ限られる人間知識の進歩の歴史では、同じ歴史でも想定されている時間のスパンが違いすぎるので一概に比較はできない。しかし、動物種としての人類の歴史の連続性に懐疑的であった唯物論者ディドロが、『百科全書』の編纂者としては、人類の連続性を前提とした人間知識の歴史的な進歩という啓蒙のイデオロギーに賭けたという事実はやはり興味深い。

V. 不寛容と二重理論

ディドロが何よりも『百科全書』の執筆者に求めるのは、概念がしっかりと定義された語彙のみを選ぶことである。表現にいささかの曖昧さがあってもならない。日常的に用いられるからといって、概念が判然と定義されていない語彙を哲学的な著作の中で用いるのは拙かろう。しかも、こうした語彙は数多いのだ。そういう語彙の定義を、絶えず変化する人間の取り決めや偏見ではなく、決して変わることがない自然に従って定義したならば、発見の萌芽になるかもしれない。だが、定義や描写を結びつけるべき、たとえば人間や動物や現存するその他の生物の本性のような不変かつ恒常的なモデルが必要なのに、ある種の個別的、局所的、過渡的な概念を斥けられない者は、仕事に困難を覚え、自らの良心や精神の性向に反して、現在においては不正確で、未来にとっては誤った、もしくは少なくとも難解で有害なことを絶えず述べる羽目になるという²¹。

ディドロによれば、どれほど大胆で高貴な天才達やどれほど偉大な古代の哲学者達の著作でも、この欠点によって少なからず歪められている。当代の著者達もこの欠点を免れているというには程遠く、こうした矛盾を永続させる不寛容や二重理論の欠陥や象形文字を用いた

²¹ *Ibid.*

神聖言語の欠点によって、人類のどれほど立派な著作であっても汚され続けるだろう。最も重要な話題についてある人物が何を考えたのかさえ分からないことが往々にしてあり、本人が気取った難解さに身を包むもので、同時代人達さえその見解を知ることができない始末だ。だから、『百科全書』がこの欠点を免れているなどと期待してはならない、とディドロは述べる。

ここには、古代エジプトの神秘主義的・秘教主義的な教義を自分達を崇拜する無知な民衆をつなぎ止めるための詐術・ペテンとして批判した『百科全書』の項目「エジプト人（の哲学）」(art. ÉGYPTENS (PHILOSOPHIE DES)、執筆者ディドロ)や、古代カルデアの占星術を、権力に阿る僧侶階級が民衆を騙すために用いた迷信として批判した項目「カルデア人（の哲学）」(art. CHALDÉENS (PHILOSOPHIE DES)、執筆者ディドロ)、さらにはドルバックの一連のキリスト教批判の著作にも通じる啓蒙主義者の典型的な議論が見られる²²。

面白いのは、ここでディドロが同時代そして未来の読者の理解を妨げる悪しき難解さに向けている批判がディドロ自身にも当てはまりかねないことである。唯物論を表明した『盲人書簡』（1749）などの著作を執筆した容疑でヴァンセンヌに投獄されたディドロは、『ドランベールの夢』をはじめとする主要著作の生前の刊行を断念し、以後、無神論、唯物論など当局の忌避に触れる大胆な内容のほとんどを草稿作品の中でのみ、それもしばしば教説を表明している主体が不明確な対話形式のフィクションで執筆するようになった。作者の真意をなかなか掴ませないディドロの執筆スタイルは、本人の作家としての資質によるところも大きい。検閲制度と国家権力による思想言論の弾圧が日常的な脅威として作家活動を脅かしていた当時のフランス国内の出版事情と、自ら筆禍でヴァンセンヌ城に収監され、『百科全書』の刊行を二度にわたって中断に追い込まれた経験から編み出した戦術的な韜晦とも考えられる。

項目「百科全書」でディドロが古今の著者の文意を難解で不明瞭にする悪しき原因の代表例として、不寛容、二重理論、神聖言語の三点をわざわざ挙げているのには意図的な根拠があると見なすべきだろう。象形文字を用いた神聖言語が啓蒙思想において、しばしば秘教的な教義によって民衆を誑かし、知識を独占しようとした古代の僧侶階級のペテンをしばしば象徴したことは先述の通りだが、それはまた、直接の批判が許されないカトリック・キリスト教会およびその教義への波及効果を期待した間接的批判でもあり、批判の対象を古代世界や異教世界の迷信に限定するその論法の実態は、フォンタネルの『神託の歴史』などにも典

²² 『百科全書』の項目「エジプト人（の哲学）」や項目「カルデア人（の哲学）」の執筆に際して、ディドロはヤコブ・ブルッカーの『哲学の批判的歴史』を参照している。これらの項目における神秘主義批判・迷信批判はディドロ本人というよりもブルッカーに由来するものと言えるが、ブルッカーを下敷とした『百科全書』の哲学項目の編纂と執筆がディドロの思想の形成に大きく与ったという意味では、ディドロ自身の思想と見なして差し支えないだろう。

型的に見られる検閲対策のアリバイ作りと言うべきものだった。この点を踏まえると、神聖言語・神聖文字に対するディドロの批判は、同時代的には、自然の概念によって定義された語彙による思想の営みの足枷となってきたカトリック・キリスト教神学とそのスコラ学的・形而上学的な議論を主たる標的としたものと考えることができる。

一方、不寛容は、十八世紀において、ヴォルテールが終世闘ったことでもよく知られるように、カトリック・キリスト教会およびフランス王政社会の宗教的・政治的不寛容を暗に指すものと考えたくなるだろう。そして、思想言論に文脈を絞れば、カトリック・キリスト教会およびフランス王政社会の不寛容によって思想言論の自由が著しく制限された状況の中で、啓蒙期の作家達の多くが検閲を避けながらぎりぎりのところで自らの思想信条を表現するために採用した文章戦略こそが二重理論であったと考ええると、全てが腑に落ちる。

ディドロは、フランス社会の不寛容が作家達に二重理論による自己防衛を強いて著作の文意を不明瞭にしている現状を憂えつつ、二重理論を思想言論の弾圧が生み出した必要悪、自由思想の展開に欠かせない武器として捉えているのだ。『百科全書』もまた二重理論の弊害を免れ得ないというディドロの見解は、検閲を意識した百科全書派の執筆陣による自己防衛的なテキスト戦略の採用を暗に認めた挑発的な発言とも取れる。難解な二重理論の存在は、ディドロが『百科全書』の理想の文体として定義する質朴な文体の実現と一般読者による『百科全書』の幅広い受容の障碍になりかねないが、検閲制度が存在する十八世紀フランス社会の言語空間の限界を冷静に認めつつ、進歩によって思想言論の自由が実現し、人類が真理を豁然する必要から解放される日が来ることへの期待を逆説的に述べているのだとすれば、人間知識の歴史的進歩に賭けたディドロの主張に矛盾はない。

VI. 『百科全書』「序文」と人間精神の発展史

『百科全書』の共同編纂者として、ディドロとともに百科全書派のフィロゾフ・科学者を代表するひとりとなったダランベールも進歩の哲学を支持した。ダランベールは、ディドロの執筆による『百科全書』「趣意書」(Le Prospectus de l'*Encyclopédie*, 1750)と並ぶ『百科全書』の哲学的マニフェストと言える『百科全書』「序文」(Le Discours préliminaire des éditeurs, 1751)で、フランシス・ベーコンによる知の系統樹とそれに想を得て自分達が考案した「人間知識の体系図」との違いを説明する中で、ベーコンの知の系統樹が想定している「文芸復興以降の人間精神の進歩の歴史的順序」と、『百科全書』の「人間知識の体系図」が原理として採用した「人間精神の諸機能の形而上学的順序」とを明確に区別している。ベーコンは、ルネサンスの文芸復興以来の西欧世界における学芸の現実の歴史的発展の順序(博識学→文芸→哲学)を根拠に、人間精神の諸能力が記憶力→想像力→理性の順で進

歩したと考えた。これに対しダランベールは、人間精神の諸能力が、中世のいわゆる暗黒時代による学芸の停滞など現実の歴史による制約を受けずに自然に発達することが許されていたら、記憶力→理性→想像力の順で発達し、学芸も本来ならば、博識学→哲学→文芸の順序で進歩したはずだと主張する。

おまけに学問の歴史は、その著作が人間に光明を広めるのに貢献した少数の偉大な天才の歴史と自ずと結びついている […] あまり昔まで遡らないように、文芸復興にしておこう。

この記念すべき時期以来の人間精神の進歩を辿ると、こうした進歩が当然従うはずだった順序で起こったことが分かる。博識学に始まり、それを文芸が受け継ぎ、哲学が完成したのである。この順序は、本当を言うと、本論の第一部で主に考察したように、自分自身の光明に委ねられた、あるいは同時代人との交際だけに留められた人間が守るはずだった順序とは異なる。実際に、我々は、単独状態の人間精神はその歩みの途上で文芸よりも先に哲学に出会うはずだと指摘した。しかし、数々の光明の世紀に先立たれた長い無知の期間から抜け出たばかりだったので、こう述べてよいならば、概念の再生は、概念の原初的な発生とは必然的に違うものとなったに違いない。²³

ダランベールによれば、ほとんどあらゆるジャンルで古代人が近代人に残した傑作は十二世紀もの間忘れ去られ、学芸の原理も同様に失われていたが、これらの不幸な時代にも他の時代に劣らず希有な天才はいた。自然は常に変わらないからだ。しかし、いつの時代もそうだが、ぼつんぼつんと長い間を置いて現れては、教養もなしに自分の光明のみを頼りにばらばらのことに取り組んだこの偉人達には何もなす術はなかった。読書と社交によって得られる概念がほとんど全ての発見の萌芽だからだ。彼らは、著名な後継者達のせいで忘れられてしまった学芸の最初の創造者達に似ている。その創造者達もまた、自分達の後継者達より後に生まれていたら、同じように彼らを忘れさせていたに違いない。車輪や歯車を最初に考案した人物は、後の時代に生まれていたら時計を発明していたかもしれないし、アルキメデスの時代にジェルベールが生まれていたらアルキメデスに肩を並べたかもしれない、とダランベールは述べる²⁴。本人の才能不足ではなく、ただただ、生まれた時代が悪かったのだ。

無知蒙昧が蔓延する野蛮な状態から人類が脱するには、地球の表面を一変させるような

²³ Jean D'Alembert, *Discours préliminaire des éditeurs de 1751 et articles de l'Encyclopédie introduit par la querelle avec le Journal de Trévoux*, Textes établis et présentés par Martine Groult, Paris Honoré Champion, 1999, pp. 110-111.

²⁴ *Ibid.*, p. 111.

「変転」(« révolution »)が必要であった。東ローマ帝国の滅亡によって、人類に残されていたわずかな知識がヨーロッパに流れ込み、印刷術の発明、メディチ家とフランソワ一世による学芸の保護によって人間精神が蘇生すると、至るところで光明が蘇った。ルネサンス期の文芸復興によって、まずは博識学が、次いで文芸が盛んになったが、哲学の発展は大きく遅れをとった。ダランベールによれば、これは、哲学が文芸よりも難しいからではなく、古代人の著作の研究が、自然科学よりも博識学や文芸に直接益するところが大きかったせいと思われる。人間が抱く諸々の概念の発生順序の初歩的段階では、理性の働きが想像力の働きに先立つのだが、その段階を超えると、眼前の考察対象に集中して一步一步立ち止まり、しばしば無駄な探求にエネルギーを費やす理性は、自分が産み出した対象に取り組みばよい想像力に比べて進歩の速度が遅い点でも不利であった。

しかし、真の哲学者にとっては、自然界と熟慮こそが最初の書物であり、古代人達も自然界を探究したに違いないのだから、我々も彼らに倣って自然の研究から始めるべきだったのだ、とダランベールは結論づける²⁵。つまり、文芸復興以降、学芸が博識学→文芸→哲学という発展の順序を辿り、哲学の進歩が遅れたのは、自ら自然を研究した古代人の学問的姿勢に倣わず、残されたその断片的な著作だけを金科玉条のごとく重んじた近代人の知的怠慢に起因する歴史の不幸だという訳である。

無知な時代の学問なるものを構成していたスコラ学も、光明が復活を遂げた初期の時代における哲学の進歩を大いに妨げた。人々は、アラブ人に注釈を施され、無数の加筆によって原形を留めなくなったアリストテレスの著作を長いことアリストテレス本人の思想と取り違えて来たのである。さらに、キリスト教の一部の神学者達が無知な民衆の信仰をつなぎ止めるために自分達の個人的な見解を教義に仕立て上げようとしたり、人間の習俗と信仰を管轄とするキリスト教の教義を、宗教とは無関係な世俗の問題であるはずの自然の探求にまで適用し、たとえば地動説を異端として断罪したりしたことが一層哲学の進歩を遅らせた。こうした宗教的権威と世俗的権威の濫用によって、人類は理性の使用と思考を禁じられるところだったが、この苦難の時代に哲学は、敵対者から逃れるように幾人かの偉人の著作の中に逃れ、世界を徐々に照らし出すことになる光明を密かに準備していたのだという²⁶。

以上のように、ダランベールは、博識学とスコラ学が生んだ過剰な古代崇拝と宗教的権威の濫用による世俗の学問への干渉を、文芸復興以来の学芸の発展の歴史の中で哲学だけ遅れをとった二大理由として挙げている。むろん、長いこと沈黙を強いられた哲学の精神が、無知で頑迷な敵対者の妨害にもかかわらず十八世紀によりやく開花したことを、無知蒙昧に対する理性の勝利を示す歴史的必然として描き出すことがダランベールの狙いであり、ルネサ

²⁵ *Ibid.*, pp. 117-118.

²⁶ *Ibid.*, pp. 118-120.

ンス以降の学芸の再生の歴史を哲学の世紀、光明の世紀たる十八世紀で締めくくるその歴史観は、明白に啓蒙主義の進歩の哲学に与する党派的な色彩を帯びている。

VII. 『百科全書』「序文」に見る科学の進歩史と偉人の系譜

文芸復興後、理性の光明が未だ無知蒙昧の闇に包まれていた時代に学問の進歩に貢献した最初の偉人として、ダランベールはフランシス・ベーコンの名を挙げている。ダランベールによれば、ベーコンは、哲学の不在を感じ取り、自然科学の様々な対象を分類・枚举し、それぞれの分野における既知の事実と今後の発見に俟つべき事実の一覧を『人間知識の増大について』で示した。次いで『新オルガヌム』では、実験物理学の重要性を知らしめるとともに、体系に対する嫌悪と、哲学は人類の進歩と幸福に貢献すべき知識であるとの考えから、哲学を有益な事物についての学問と見なし、自然の探求を勧めた。技芸を重視するとともに、自然科学から道徳、政治、経済まで、およそ人類に関係するあらゆる学問について深い考察を残したベーコンの業績は、医学におけるヒポクラテスのそれに匹敵した。しかし、残念なことに、どの分野においても、党派のリーダーの著作しか名声を博することはできないので、党派のリーダーではなく、哲学的な主張も大胆さに欠けるベーコンの著作は世間の耳目を驚かせるに至らなかった。学問の発展を妨げていたスコラ学の呪縛を完全に振り払うことができなかったのもその一因だという²⁷。

そして、デカルトがベーコンに続いた。デカルトは、科学の分野で代数学、代数学の幾何学への応用、幾何学の物理学の応用に基づく屈折光学といった目覚ましい業績を挙げたばかりでなく、哲学においても創意工夫の才を発揮した。デカルトが唱えた渦動説は今となっては滑稽だが、渦動説を否定する天文学的な観察・考察・計算が不十分であった当時、物体に働く重力を流体の渦動による遠心力によって説明するその理論は、考え得る限り魅力的かつ巧妙な仮説だったのであり、渦動説は、人類がその後真の宇宙体系の法則に辿り着くために欠かせない通過点となったのだ、とダランベールは主張する²⁸。

哲学者としてのデカルトは、形而上学の分野で生得観念を認めるという誤りを犯したが、少なくともスコラ学や見解や権威といった偏見や未開状態の桎梏を揺るがそうとする反抗によって哲学に貢献したという。ダランベールによれば、現にデカルトをこうして批判する際にも、自分達は全てを疑ってかかるデカルトの方法を彼自身に対して向けているのだ。そして、デカルトの見解に誤りがあったとしても、それは、馬鹿げた見解にしがみつく子供のよ

²⁷ *Ibid.*, pp. 120-122.

²⁸ *Ibid.*, pp. 123-124.

うな民衆から危険な武器を取り上げるために差し出すいわば玩具としての役割を立派に果たしたのだという²⁹。

そして、ホイヘンスを経て、いよいよニュートンが登場し、哲学に決定的な形態をもたらした。ニュートンは、自然学から曖昧な推論や仮説を一掃し、自然学を実験と幾何学に服させるべきとの考えから、幾何学や自然現象の説明に広く用いられている無限の計算や数列を考案した。ニュートンはまた、重力の実験やケプラーの観察を踏まえて、惑星を軌道に留める引力を発見するとともに、天体の運動を、その原因から切り離した上で極めて正確に計算する方法を説いた。さらに光学の分野でも、光線のスペクトルを分離して見せた。ダランベールは、ニュートンの宇宙に関する理論があまりに広く承認されたことをよしとせず、ニュートンよりも先に古代ギリシア人が引力説を発見していたと主張する言いがかりを一蹴し、古代人においては不確かで空想的な体系・仮説に過ぎなかった引力説を証明のレベルにまで引き上げたことをニュートンの最大の功績としている³⁰。ダランベールは、ニュートンが物理学にスコラ学の「隠された性質」(« *qualités occultes* »)を再導入したという、よりもっともらしい批判も斥け、ニュートンは、デカルトの渦動説によっては天体の運動を説明できないので、その第一原因は未知ではあれ、天体を互いに引きつけ合う力が存在することを物理法則として証明したのだ、と反論している。

ダランベールによれば、ニュートンは形而上学については多くを語らなかった。ニュートンが物理学を造ったとすれば、形而上学を造ったのはロックの功績である。ロックは、それ以前の哲学における抽象概念や記号の濫用を誤謬の原因と見なし、書物から得た知識ではなく深い内省によって、形而上学を精神の合理的な実験物理学として打ち立てた³¹。

ダランベールは、文芸復興以降の学問を変革したベーコン、デカルト、ニュートン、ロックの四偉人の大発見ほどではないにしても、学問の進歩に貢献した数々の発見として、ガリレイの天文学的発見と加速力の理論、ハーヴェイの血液循環説、ホイヘンスの幾何学と物理学、パスカルによるサイクロイドや液体と気圧の均衡に関する考察、感覚と想像力の誤謬に関するマルブランシュの分析、ボイルの実験物理学、ヴェサリウス、シデナム、プールハーヴェの業績を挙げている。さらに、こうした偉人の系譜の掉尾を飾る当代の偉人として、ダランベールはライプニッツの名を付け加え、ニュートンとともに微分計算を発明した功績と形而上学への多大な貢献を認めつつも、「充足理由」、「モナド」、「予定調和」、「楽天主義」といったライプニッツの哲学概念をことごとく批判している³²。

以上のようにダランベールが素描する文芸復興以後の学問の発展史に特徴的なのは、傑出

²⁹ *Ibid.*, p. 125.

³⁰ *Ibid.*, pp. 125-126.

³¹ *Ibid.*, pp. 127-128.

³² *Ibid.*, pp. 129-130.

した才能を持つ偉人が引き起こした断続的な「変転」(« révolution »)が、科学を中心とする学問および哲学の歴史的進歩の原動力になったことを強調する一方で、彼ら偉人の業績とて、それぞれの時代状況に特有の偏見や誤謬といった限界を抱えていること、凡人の理解をあまりに超えた彼ら偉人の理論が、ニュートンのような例外を除いて、同時代の自国ですんなりと受け容れられた訳ではなく、しばしば本人の生前は誤解を受け、時間をかけて後世の評価を得た歴史的経緯にも目を配っていることである。

ダランベールは、偉人の理論の受容のスピードが国民によって異なる点にも触れ、イギリスではとうの昔にデカルトの自然学がニュートンの理論に打倒されていた頃に、フランスではニュートンが無名の存在だったばかりか、スコラ哲学が未だ命脈を保っていたこと、フランス国民がようやく受け容れようと思った頃にはデカルトの渦動説は既に破壊されており、しかもフランス国民がデカルト主義を断念したのがたかだか二十年前のことに過ぎないことを指摘し、最新の趣味を追い求めながら、学問においては古い見解にしがみつきたがるフランス人の国民性を自嘲気味に揶揄している。ダランベールは、過去のものとなった理論に固執する態度を哲学が恥とすべき国民的偏見のなせる業とし、過去の偉人には敬意を払いつつ、その誤謬は潔く捨て去るべきであり、偉人本人の主張と祖述者の主張を混同してはならない、と釘を刺す。

ダランベールによれば、新旧学派の対立に決着をつけるのは、しばしばどちらの立場に付こうとも利害を持たない若者であり、実際、若い世代の幾何学者達の間でデカルトの渦動説が見事に閉め出されてしまったので、今や誰も著作で渦動説に触れようとする者がいないという。しかし、いずれニュートン主義が別の理論に打倒される時が来たら、現在数多いニュートン主義の支持者達は、(デカルト主義者など)他の学派の支持者達に演じさせてきたのと同じ役目を演じることになるだろう。それが人間精神の性質というものであり、それが哲学者をも支配する自己愛と、あらゆる発見が直面しなければならない反駁との結果なのだ、とダランベールは結論づけている³³。

ルネサンス以降の学問の再生の牽引力となったベーコン、デカルト、ニュートン、ロックの四偉人の功績を讃えつつ、彼らが起こした「変転」が哲学の遅ればせの開花に貢献し、とりわけ同時代のフランスの科学界でニュートン主義がデカルト主義に取って代わる支配的理論となったことを強調するこの学問の発展史には、啓蒙主義者および百科全書派に共通する進歩の哲学と、科学者ダランベール個人の立場でもあるニュートン主義擁護の言説とが、当然とはいえ、露骨なまでに反映されている。しかし、ある特定の理論や立場に与することを科学者・哲学者でも免れ得ない(集团的)自己愛に起因する宿命としたダランベールの指摘は、科学理論の学派対立に潜む普遍的な心理的・社会的動機を見抜いた鋭い洞察であり、ダ

³³ *Ibid.*, pp. 131-133.

ランベール自身、自らの発言の党派性については誰よりも明晰に意識していたはずだ。また、どれほど時代を画する大発見や理論であろうとも反駁に直面することは避けられないという指摘には、たとえば、ある時代の科学者の大半の支持を集める大発見や理論が新たな大発見や理論によって取って代わられるパラダイム転換を科学の発展の原動力と見なし、反証可能性を科学理論の条件とする近代科学史の発想に通ずる、大科学者ならではの相対的な視点が伺えて興味深い。

結論

ディドロは『百科全書』の項目「百科全書」で主として技芸の進歩の歴史を例に挙げ、国益を口実に先端技術やその発明者の功績を秘匿しようとする政府および「良き市民」らの偏狭な精神を批判し、一国の目先の経済的・政治的利害や国民的趣味を超えて人類全体の未来に貢献する進歩の哲学を『百科全書』の編纂方針として力強くアピールしている。そして、『百科全書』がより多くの読者を獲得する手段として質朴かつ多彩な文体の必要を説きつつも、しばしば内容の理解の妨げとなる二重理論や韜晦を不寛容な検閲から身を守るための必要悪として認めている。

一方、ダランベールは『百科全書』「序文」で、文芸復興期以来、ペーコン、デカルト、ニュートン、ロックをはじめとする偉人が哲学と科学の変革と進歩にもたらした功績を称揚し、近代における主要な科学的発見やそれぞれの時代を画した科学理論の流れを科学の進歩の歴史として素描している。また、科学の進歩の障碍となってきた新旧理論の支持者達による学派对立や古い理論に固執する国民的偏見を単に批判するのではなく、人間の普遍的情念に起因する不可避的な現象とした上で、古い理論が必ず反駁を受け、新しい理論によって乗り越えられることを科学理論の宿命とすることで、科学の歴史的進歩を正当化している。

以上の点から、技芸と科学という主たる対象領域の違いはあれ、ディドロとダランベールが一国の国家的・経済的利害や国民的偏見に囚われない技術や学問の自由な発展を理想とする進歩の哲学を共有していたこと、両者が古今のあらゆる学芸に関する知識を読者に提供することで未来にわたる人類の知的進歩の礎とすべく『百科全書』を構想する一方で、一般読者層の拡大による啓蒙主義の一層の浸透を目指して『百科全書』を党派的言説のメディアとして十二分に活用していたことが分かる。